野方久保遺跡 1

—第３次調査報告書—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第300集

1 9 9 2

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

九州の中枢都市として発展しつづける福岡市は、開発事業も増加の一途をたどっています。これに伴い失われていく文化財も多く、本市ではその保護に努めるとともに、やむなく失われていく文化財について、記録保存のための発掘調査を行っています。

本書もそうした中のひとつで、西区野方地内に計画された宅地造成に伴って実施した、野方久保遺跡の発掘調査報告書です。調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての生産にかかわる手がかりを得ることができました。

調査に際しご協力をいただいた関係者各位、ご指導を頂いた諸先生方に深く感謝する次第であります。

平成４年１月13日

福岡市教育委員会

教育長　　井口雄哉

例　　言

1．本書は、福岡市西区野方における住宅建築地開発に先立って、福岡市教育委員会が1990年度に緊急調査した野方久保遺跡第３次調査地点の報告書である。

2．本書使用の遺構実測図は、宮井善朗、井上靖崇、杉村文子、吉岡員代、清水文代が作成した。また、製図は、宮井が行なった。

3．本書使用の遺物実測図の作成、製図は、宮井が行なった。

4．本書使用の写真は、宮井が撮影した。

5．本書の執筆、編集は、宮井が行なった。

目　　次

1．はじめに……1

2．調査の記録……5

3．小結……9

1．はじめに

（1）調査に至る経過

1990年、西区野方２丁目地内における戸建住宅開発に伴う事前調査願いが㈱西興住宅、㈱城南ハウスから提出された。これをうけて埋蔵文化財課で試掘調査を行なった結果、遺跡が確認された。その後協議に入り、遺跡に係る285m²の内道路下になる175m²ついて調査を行なうことになった。調査は、1991年１月４日から30日にかけて行なった。

（2）調査体制

調査主体　福岡市教育委員会埋蔵文化財課第１係　課長　柳田純孝　係長　飛高憲雄

調査庶務　中山昭則　調査担当　宮井善朗

発掘作業　鬼丸邦宏　井上靖崇　太田孝房　清水文代　杉村文子　中牟田サカエ　西納テル子
能美八重子　吉岡員代　吉岡竹子　吉岡アヤ子　吉岡蓮枝　藤タケ　瀬戸啓治
西島初子　西島タミエ

整理作業　林由紀子　大石加代子　土斐崎つや子　小森佐和子　堂園晴美

（3）野方久保遺跡の立地と歴史的環境

野方久保遺跡は、飯盛山の北麓に位置する。飯盛山の北側には、南西～北東に向けて早良西台地と呼ばれる中位段丘が発達している。台地は、小河川の貫流によって舌状に分割され、それぞれに遺跡が発見されている。山裾に近い野方中原遺跡は、弥生時代後期～古墳時代前期の大規模集落である。弥生時代後期の集落には、環溝がめぐらされている。また、古墳時代初頭の箱式石棺墓から、後漢鏡が出土している。野方久保遺跡は、十郎川を挟んで野方中原遺跡の東側に位置する。現在までに二次にわたる調査が行なわれており、今回が第３次調査となる。第１次調査は1984年、野方柳原台団地造成に伴う調査で、11,000m²にわたって調査された。検出遺溝は、弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡70基をはじめとして、弥生時代甕棺墓、掘立柱建物、水田跡など弥生時代～中世にわたる。住居跡からは、銅鏃計８本、銅鋤先１本など青銅器が多数出土している。２次調査は、遺跡の北方で行なわれ、1986年に調査された。調査面積は670 m²である。弥生時代甕棺墓67基が検出され、時期は前期末～中期後半にわたる。出土した甕棺墓中４基に副葬品が見られる。５号甕棺（中期前半）から銅剣、把頭飾、25号（中期前半）から銅剣、11号（前半～中葉）から碧玉製管玉、57号（前半～中葉）から硬玉製勾玉が出土した。これらの調査から野方遺跡群は弥生時代～古墳時代にかけて大集落を形成していたことが知られ、この小地域の拠点であったことが認められる。

1 野方久保遺跡
2 野方中原遺跡
3 野方勧進原遺跡
4 羽根戸原A遺跡
5 広石遺跡群
6 名切谷遺跡
7 大音遺跡
8 羽根戸原C遺跡
9 吉武遺跡群
10 笠間谷古墳群
11 野方古墳群
12 羽根戸古墳群
13 羽根戸南古墳群

Fig.1 周辺遺跡分布図(1:25,000)

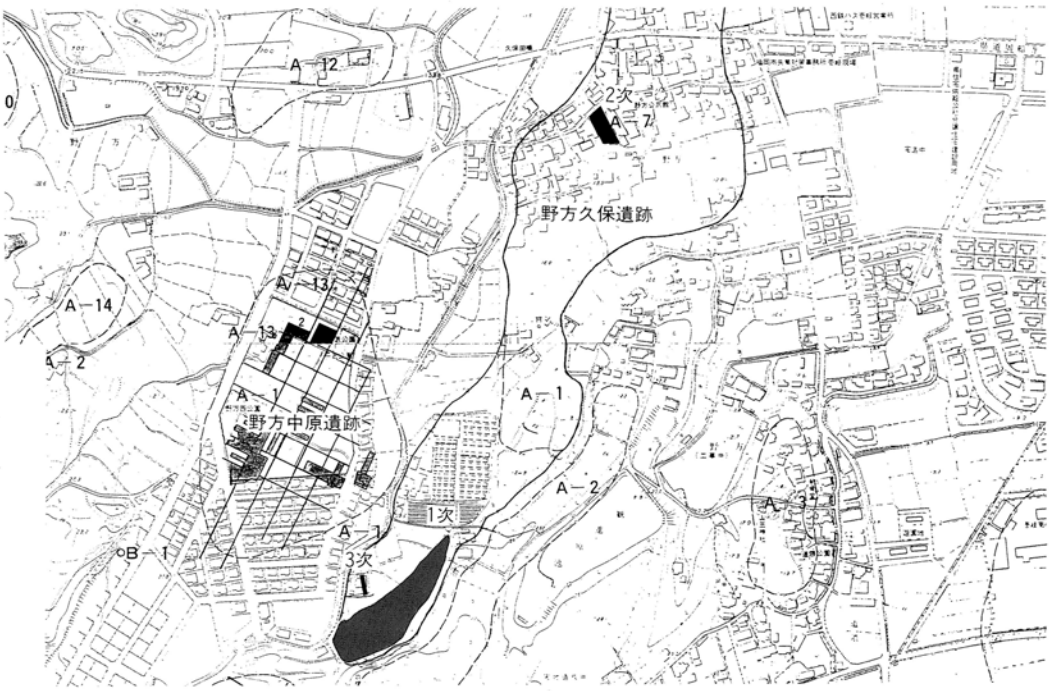


Fig.2　野方久保遺跡位置図 (1:8,000)

Fig.3　第2次調査風景

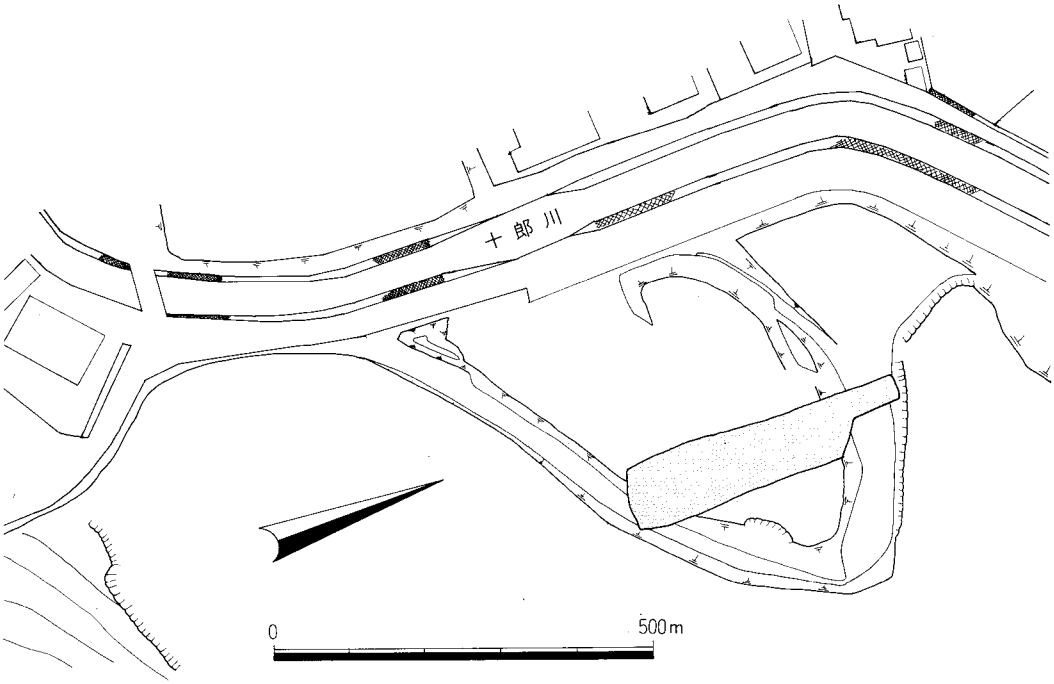


Fig.4　調査地点位置図(1:1,000)

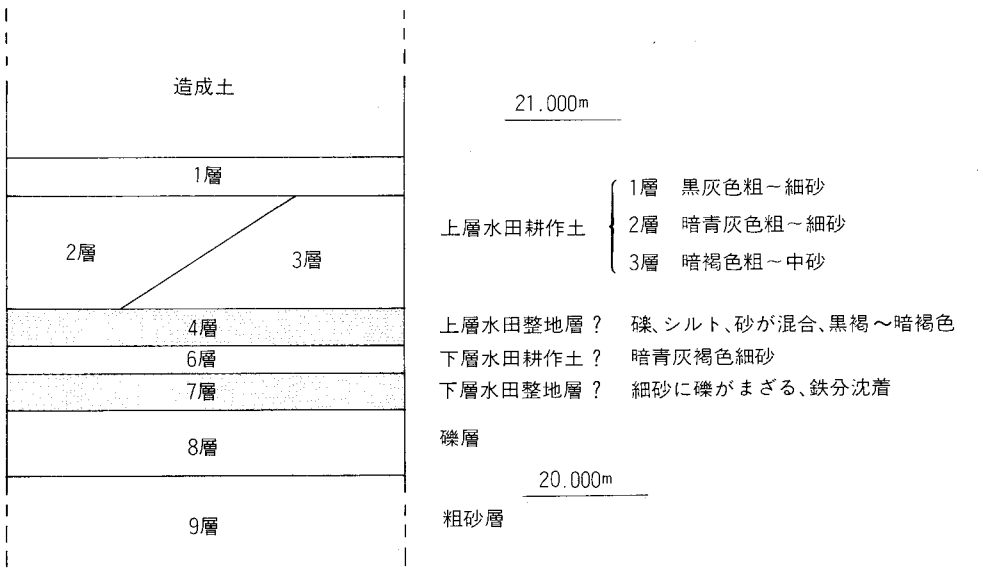


Fig.5　基準土層模式図

2．調査の記録

（1）概要と層序

調査地点は、旧十郎川の氾濫原と考えられる沖積地上に立地する。現十郎川の流路まで西へ35ｍである。層序をFig.５に示す。旧表土と考えられる１層の上に約２ｍの造成土がのっていた。１～３層は旧水田耕作土の可能性が強い。４層は、礫、粘質土、砂が混じった層で、整地層の可能性がある。６層は、一部グライ化した部分が認められ、やはり水田耕作土の可能性がある。遺溝のほとんどは、４層上面もしくは６層上面で検出した。７層は４層に酷似した層で、やはり整地層の可能性がある。遺物は、８層まで認められた。

各層の時期について、包含していた遺物をもとに考えてみると、６層からは須恵器片が出土しており、古墳時代後期を下限とすると見られる。また、７層以下には須恵器は含まないが、７層には、外面に叩きをもつ土師器が見られ、古墳時代の可能性が強かろう。８層の観察可能な土器は、弥生時代後期である。

（2）検出遺溝（Fig.６）

検出した遺溝は、溝、土壙、ピットである。覆土、堀り込み面から考えて、三期ほどに分かれよう。４層から堀りこむと考えられる遺溝が、溝１、２、土壙４、９などである。このうち青灰色砂を覆土とする土壙４、９は、覆土からみて近代以降と考えられる。溝１、10は、直線的にのびる溝で、水田にかかわるものであろうか。

６層から堀りこむ遺溝には、溝11、土壙12、溝13などがある。これらの遺溝の覆土は、いずれも黒灰色を呈する。溝11は、溝10とほとんど同方向にのびる溝で、溝10より古い。

また、調査区北端部の７層下で溝14を検出した。覆土は、黒色有機質土と灰色砂の互層で水流があったことを示していた。また溝その物は、調査区内では浅く40cmを図るにすぎないが、調査区外北側へ広がるものと考えられる。人口の水路もしくは、旧十郎川の蛇行の痕跡であろう。

これらの遺溝の時期を示すものはきわめて少ない。遺溝出土の遺物で観察に耐え得るものは、ほとんど無いが、６層中より須恵器片が出土しており、一応古墳時代後期以降の遺溝と考えておきたい。遺溝の下限は、問題になるところであるが、本調査区全体及び表土剝ぎから包含層堀り下げまでの期間中、中世以降の遺物はまったく出土していない。したがって、少なくも４層以下は、包含している遺物の時期を大きく隔たることはないだろうと考えている。

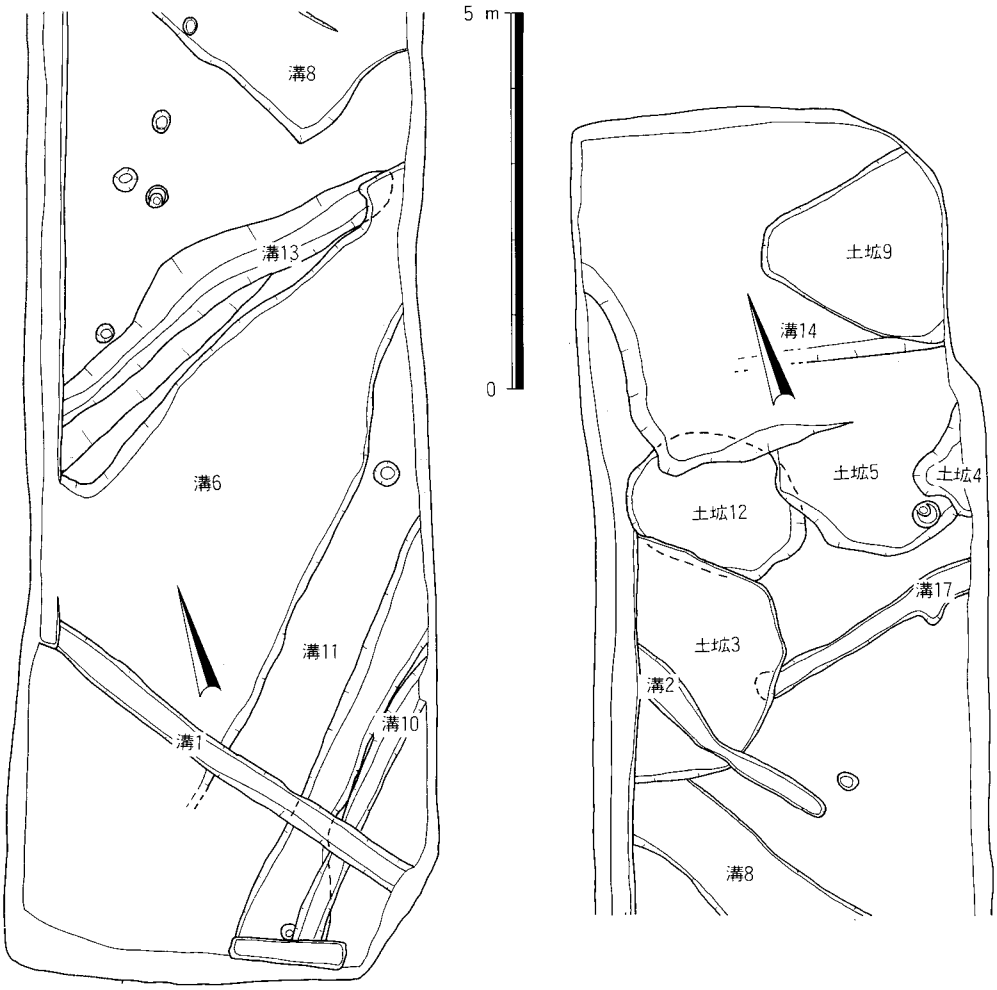
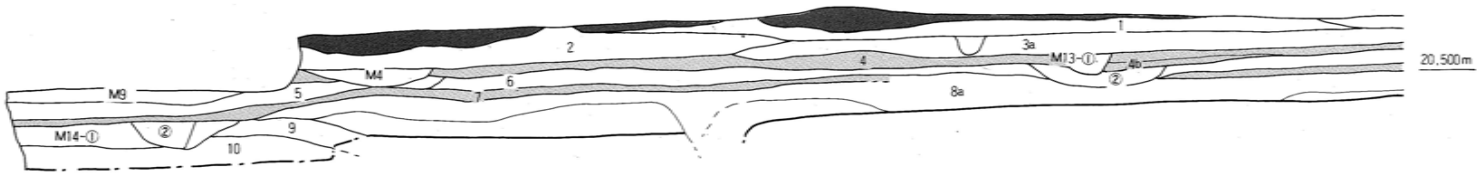


Fig.6　調査区遺構全体図(1:100)



1　黒褐色粗～細砂　陶汰不良
2　暗青灰色粗～細砂　陶汰不良
3a　暗褐色粗～中砂
　陶汰不良　1･2より良 部分的にグライ化
3b　黒色を呈する
4　礫、細砂、シルト等の混合、黒褐色を呈する
　上面整地層
5　暗紫灰色粗～細砂
6　暗青褐灰色細砂　,陶汰かなり良
7　淡褐色細砂に礫混合　北辺では鉄分多く沈着
　下面整地層、部分的に不明個処有り
8a　黒色礫層、マトリックス粗砂
8b　黄褐色礫層、マトリックス粗砂
9　黄褐色粗～中砂、北端ではグライ化しやや粒土細くなる
10　礫層、マトリックス粗砂

M1　黒色シルト
M10　黒褐色粗砂
M11　暗青灰色粗砂 陶汰良
M13-①　黒色粗～細砂
　②　粗砂～礫多
M4　暗青灰色粗～細砂
M9　暗青灰色粗砂
M14-①　黒色有機質土 黄褐色粗砂互層
　②　黒色有機質土

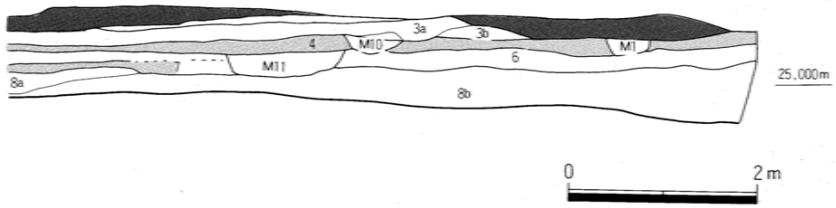


Fig.7　調査区東壁土層図(1:80)

Fig.8　調査区東壁土層図

（3）出土遺物

出土遺物はきわめて少なく、50数片を数えるにすぎない。実測可能な土器はさらに少なく、Fig.10に掲げたものがほとんどすべてである。

１は須恵器甕の胴部片である。土壙９から出土した。外面は擬格子タタキ、内面は同心円文の当て具痕が残る。２は東壁にそってあけたトレンチ（東トレンチ）内よりの出土で、４層以下のものである。外面に擬格子タタキを施し、内面には同心円文の当て具痕が残る。３は６層出土の須恵器甕である。外面は擬格子たたきを施す。内面には車輪文の当て具痕が残る。４は遺溝検出面よりの出土であるから、４～６層のものであろう。外面には擬格子タタキ、内面は同心円文の当て具痕が残る。５は東トレンチ出土の須恵器蓋坏である。遺存部のみでは蓋か身か不明である。外面はヘラケズリ、内面には当て具痕が残る。６は須恵器蓋である。６層出土。７は８層出土の弥生土器である。受け部径17.6ｃｍの器台である。受け部端面に刻み目を施す。内外面ハケ調整。８は弥生土器甕の口縁部であろう。端部を面取りする。外面は端部付近までハケ目を施す。９も８層出土である。甕の口縁部であろう。内外面ナデ調整される。10は６層出土。弥生土器の突帯部であろう。断面台形で、端部は凹面をなす。11は８層出土の複合口縁壺の口縁部である。端部は面取りされ、上方へ拡張される。７～11の弥生土器はいずれも終末期のものである。

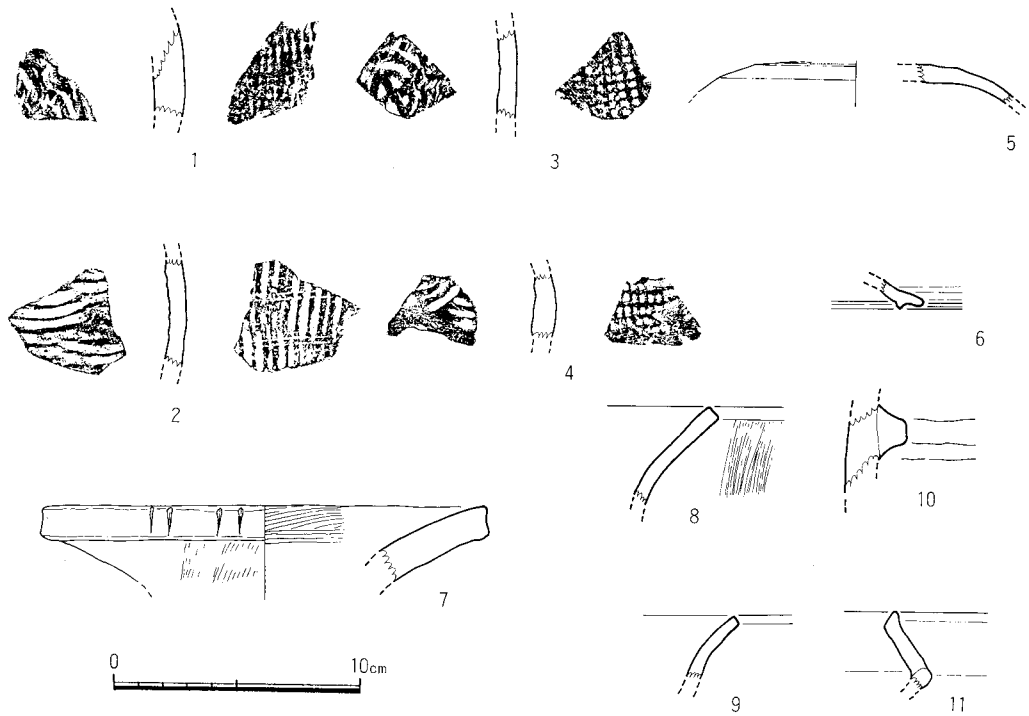


Fig.10　出土遺物(1:3)

3．小　　結

野方久保遺跡３次調査は、野方久保遺跡内の沖積部の調査であり、生産遺跡の検出に期待がもたれたが、残念ながら水田遺溝や、それに伴う水利遺溝などは検出することができなかった。検出されたのは、不定形の土壙や溝などで、いずれも人為的な所産かどうか確実でないものである。出土遺物もきわめて少なく、周辺集落部からの流れこみの可能性が強いものと考えられる。

このように遺溝、遺物については、野方久保遺跡の内容の一端を明らかにするような成果には、きわめて乏しいものといわざるをえない。しかし、土層堆積状況の観察よって、水田遺溝の存在が推定され得るにいたったことは、重要な成果といえよう。下層水田と思われる６層中には、古墳時代後期の土器が出土し、該期にこの周辺が、生産域として利用された可能性が示されるようになった。この６層および４層については、自然化学的分析に資するためのサンプルを採取しているが、諸般の事情により、まだ分析にはいたっていない。早い時期に分析を行ない、その成果とともに再論する機会を待ちたいと思う。

なお土層観察とその解釈については、西南学院大学助教授磯望先生の多大なご教示をえたことを明記して、深甚の謝意を表する。

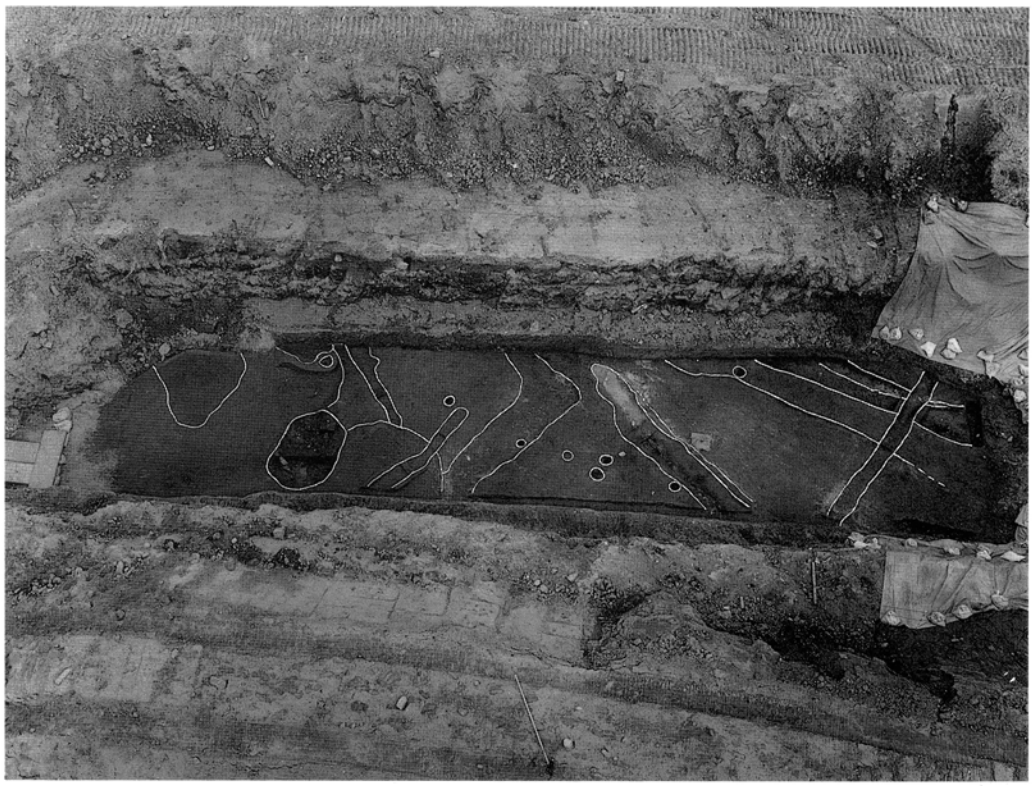
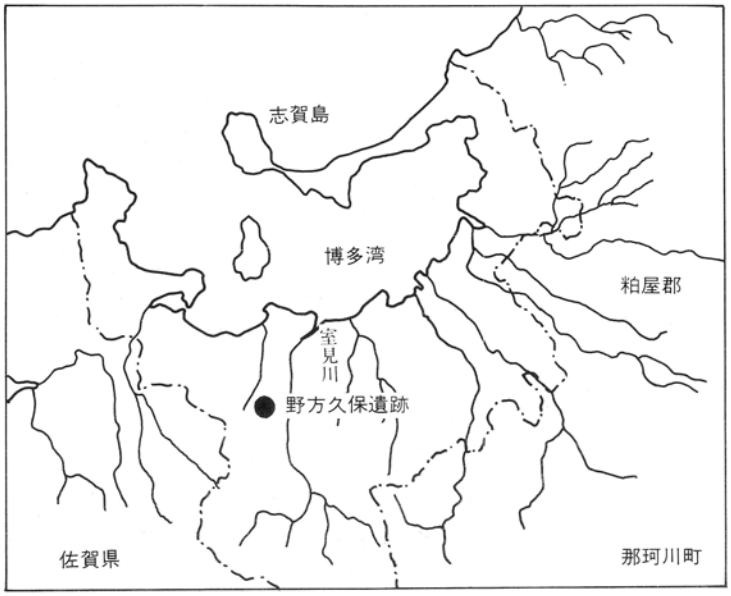


Fig.11　調査区全景



遺跡調査番号	9056		遺跡略号	ＮＫＵ－3
調査地地籍	西区野方2丁目384-3外		分布地図番号	叶岳　105
開発面積	1100.39㎡	調査対象面積	170.75㎡	調査面積118.5㎡
調査期間	1991年1月4日～1月30日		事前調査番号	２－２－188

野方久保遺跡　1

福岡市埋蔵文化財調査報告書第300集

1992年3月13日

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印刷　㈱玉川印刷所

野方久保遺跡1

福岡市埋蔵文化財調査報告書第300集

1992

福岡市教員委員会